＜認知症対応型共同生活介護用＞

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
Ⅰ. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	3072500477
法人名	有限会社　グループホーム開門荘
事業所名	グループホーム開門荘
訪問調査日	平成20年10月16日
評価確定日	平成20年11月11日
評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

［取り組みの事実］

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

［取り組みを期待したい項目］

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

［取り組みを期待したい内容］

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 ＝家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家　族 ＝家族に限定しています。

運営者 ＝事業所の経営･運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員＝管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム ＝管理者･職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

[認知症対応型共同生活介護用]

1. 評価結果概要表

作成日　2008年10月29日

【評価実施概要】

事業所番号	3072500477
法人名	有限会社　グループホーム開門荘
事業所名	グループホーム開門荘
所在地	〒647-1211 和歌山県新宮市熊野川町日足752　(電　話) 0735-44-0770

評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま		
所在地	和歌山市四番丁52ハラダビル2F		
訪問調査日	平成20年10月16日	評価確定日	平成20年11月11日

【情報提供票より】(平成20年　9月　9日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成17年　5月　27日	
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計　9　人
職員数	9　人	常勤　6人, 非常勤　3人, 常勤換算　7.5人

(2) 建物概要

建物構造	木造造り
	1 階建ての　1 階　～　1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃 (平均月額)	日額 1500　円		その他の経費 (月額)	円
敷　金	無			
保証金の有無 (入居一時金含む)	有 (　110000円)		有りの場合 償却の有無	有
食材料費	朝食	300　円	昼食	400　円
	夕食	500　円	おやつ	100　円
	または1日当たり	1300円		

(4) 利用者の概要 (平成20年　9月　9日現在)

利用者人数		9 名	男性	3 名	女性　6 名
要介護1		3　名	要介護2	1　名	
要介護3		2　名	要介護4	1　名	
要介護5		1　名	要支援2	1　名	
年齢	平均	87 歳	最低	85 歳	最高　91 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	熊野路クリニック、熊野川歯科診療所

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

熊野川に流れ込む清流と田園風景を見ながら高台を登ると緑豊かな山間部の静かな立地条件の中に自然木を基調としたホームが見えてくる。ホーム周辺には、さつき温泉や公共施設、小･中学校があり、町の文化圏がすぐそばにある。ホーム内にある広いウッドデッキに出ると、四季折々の花が植えられ、ホームで飼っているニワトリの声と入居者･職員の笑い声がこだまする。家庭的な雰囲気の中、入居者はゆったりと自分のペースで、それぞれ役割をもちながら過ごしている。職員も入居者と話しをすることで自分が成長するというように、職員･入居者ともに輝いている空間がそこにある。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況 (関連項目:外部4) 運営者･職員は自己評価･外部評価の意義を十分理解しており、前回の評価を生かし、入居者の記録、家族への連絡、地域との交流、その人らしい居室など、改善に向けて取り組んでいる。
	今回の自己評価に対する取り組み状況 (関連項目:外部4) 前回の主な改善課題の取り組みを重視しながら、今回の自己評価を管理者、職員全員で取り組んだ。よりよいサービスの向上のために努力しており、評価の意義はよく理解されている。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み (関連項目:外部4, 5, 6) 運営推進会議は年1回開催されている。地域の区長、市担当者、市社会福祉協議会職員、入居者の家族、入居者で構成され、今年はホームより災害の取り組みをしてほしいと要望し、地域住民と合同で地震訓練にホームとして初参加する予定となっている。市町村担当者とは良好な関係にあり、適宜、意見交換しながら質の向上に努めている。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法･運営への反映 (関連項目:外部7, 8) 家族への報告は毎月行われており状態変更時は適宜電話対応している。家族の訪問時や運営推進会議時には、より良いサービスが提供できるように家族から意見を聞くよう努めている。運営適正委員会のパンフレットを共同空間に置き、苦情を受け入れやすい体制にしている。
重点項目④	日常生活における地域との連携 (関連項目:外部3) 地域の住民から声をかけてもらい裏山で花見を楽しんだ。神社の祭りでは「餅ほり」の時に地域の人が入居者の餅を拾う場所を確保してくれている。中学生の職場体験の受け入れ、保育園児との交流もあり、地域･子供達との触れ合いにも努めている。また、地区の地震連絡網で地域との協力体制も築かれている。

2. 評価結果(詳細)

(▭ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅰ. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	「感謝と奉仕の精神」というこれまでの理念に、「地域社会の中で人と人とのふれあいを大切にする」という理念が今年より加えられ、玄関と居間の壁にその言葉がさりげなく掲げられている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎朝のミーティングと月1回の職員会議で、理念の読み合わせをしている。理念を共有することで、職員全員で入居者全員が家族の一員として、家庭と同じような空間で入居者ごとに合った過ごし方ができるよう配慮している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域の住民からの声かけで花見を楽しんだ。神社の祭りでは、「餅ほり」の際、地域の人が入居者の餅を拾う場所を確保してくれている。中学生の職場体験を受け入れ、地域の学校との交流にも努めている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	運営者・職員は自己評価・外部評価の意義を十分理解しており、前回の評価を生かし、入居者の記録を残し、家族への連絡や、地域との交流を多く持つよう取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年はまだ1回の開催に留まっている。地域の区長、市担当者、市社会福祉協議会職員、入居者の家族、入居者の委員で構成されており、今年はホームより災害の取り組みをしてほしいと要望し、地域の地震訓練に合同参加できるようになった。	○	年1回の開催ではサービス向上に十分生かしきれない面もあり、次回開催日を決めずに散会することは、集まりにくい状況を作る恐れがある。会議の成果がサービスに反映できるように、定期開催に向けての取り組みに期待する。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容･実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市町村担当者とは、分からないことはすぐ電話連絡できる関係ができており、適宜、電話連絡している。市町村担当者も、2か月に1回以上の頻度でホームを訪れ、意見交換している。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	月に1回、入居者ごとに家族への便りを、本人の暮らしぶりなど時折、写真も同封し報告している。3か月に1回行われるケア会議の内容についても、今年から報告している。適宜、状態変更時、電話対応している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営適正委員会のパンフレットを共同空間に置き、苦情を受け入れやすい体制にしている。家族の訪問時や運営推進会議のなかで、家族･本人から意見を聞くよう努めている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員が離職する時は、退職の1か月前から交代職員に情報の引き継ぎを行い、交代職員同士が2人1組で勤務するシステムとし、入居者とも馴染みの関係が壊れないよう配慮している。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	併設のヘルパー事業所と合同勉強会を開催している。外部の研修へは職員の希望も聞きながら個人の能力、やる気に応じ受講者を決めており勤務の一環として研修参加できるよう配慮されているが、1年半程度の間に数回の実績である。。	○	研修は研修内容のみならず、他の施設からの参加者と交流できる機会でもあり、認知症ケアの最新の情報を学び、将来的に上級資格に挑戦する中で、どの職員にも研修の機会が得られることが望ましい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に加入している。年1回、他のグループホームと職員の交換学習を行っている。入居者と共に養護老人ホームや特別養護老人ホームを訪問し、職員同士交流する機会をもっている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容･実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	事前に入居者･家族に見学してもらっている。居室の都合上、体験の泊まりはできないが、日中の1日体験を行っている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	入居者から職員は暮らしの知識を学び、入居者自身も施設の中で役割を持ちながら暮らすことができるように取り組まれていて、お互いが支え合う関係を大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常にあきらめないで、前向きな姿勢で職員は家族からの聞き取りを十分に行うようにし、本人の思いや意向を把握するようにしている。また、センター方式を活用して本人の想いを日々の暮らしの中で役割として反映できるよう努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	本人や家族の要望を取り入れ、介助の仕方･援助の仕方を職員全員で検討している。より具体的で達成可能な短期目標を設定し、本人同意の上、生活の中に役割として組みこんでいる。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3か月毎に介護計画の見直し会議を行い、家族にその内容を連絡している。状態の変更時には家族と相談して計画の見直しを行っている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容･実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	地域のボランティアや保育園児が入居者と踊りや交流をする場となっている。理美容師や歯科医の訪問時は、地域の人にもホームを開放している。地域の協力病院まで遠いため、職員が入居者の通院介助を行っている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	馴染みのかかりつけ医は変わらず、必要に応じて職員も診察に同行し、直接お話を聴くなど適切な医療を受けられるよう支援している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	ケースごとの対応話し合いをしている。事業所としての方針はまだ決まっていない。	○	利用開始時の契約時に家族や本人の意向を聞き、かかりつけ医とも相談できるよう事業所の方針を確立し、重度化した場合や終末期のあり方を、できるだけ早い段階での話し合いを持ち、家族や本人、かかりつけ医と職員全体が方針を共有できることが望ましい。
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 1. その人らしい暮らしの支援 (1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	入浴介助･排泄介助時は特に、入居者ごとの対応･声かけに気を配っている。書類は事務所の鍵のかかる場所に保管し外へ持ち出さないことを徹底している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝食は自由な時間に食べれるよう配慮されている。病院などに入居者の友人が入院した時は、その見舞いに入居者の都合に合わせ、職員が付き添っている。日々の過ごし方は1人1人に合わせ、自由に過ごせるよう支援している。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	配膳、調理、買い物等できる人は職員と自然な形で行っている。温かいものは、温かいうちにすぐ食べられる配慮がされている。朝食はパンとご飯から選べる。昼食時は和やかな会話をしながら職員も入居者と一緒に昼食を食べている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	希望があれば、毎日でも入浴できるよう支援している。基本の時間帯は夏場は午後から、冬場(11月から)は夕食後の時間帯であれば自由に入浴できるようにしている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	花への水やり・米洗い・調理・ニワトリの世話等、入居者の希望や意見を取り入れて役割を分担するように取り組み、入居者が自分の役割を前向きに楽しんでいる。重度の人には穏やかに過ごしてもらえるよう表情の読み取りに努めている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	食事作りの材料を買いに出かけたり、美容院に行ったり、病院へ見舞に行ったりと、入居者ごとの希望に添って、外出支援が行われている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は鍵をかけていない。徘徊に対しても特にセンサーをホームにつけることなく職員が自然な形で見守りを行っている。また、生活歴から考察した役割を行うことで落ち着きが取り戻せるよう取り組んでいる。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	1年半前に、職員・利用者合同で夜間想定の防火訓練を行っている。災害マニュアルも用意され、同地区の地震時連絡網の中にホームも入っている。備蓄は準備中となっており、地域の方との合同地震訓練も今後、行っていく予定である。	○	職員数の多い日中はホームが地域での災害に対して貢献する役割を果たし、職員が手薄となる夜間の災害については地域住民に協力依頼できるシステムを作り、1年に1回は地域住民と合同で災害訓練を行う機会を持てるよう検討することを期待したい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 (実施している内容･実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量･水分量をチェックし各人の状態を注意して自然な声かけの中で補うよう支援している。特に水分は入居者ごとに飲みやすい状態で提供するよう努め、日中･夜間を問わず個人の部屋へ自由にお茶を持ち出すことができる。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり (1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間 (玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、ﾄｲﾚ等) は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花々が自然に生けられ、入居者の作品も所々に展示され、自然木を基調とした共有空間は暖かさが感じられる。広いガラス窓からは庭のテラスが見え、自然の光･外気が十分取り入れられる工夫がある。テレビ前におかれたソファーや椅子はゆったりとした和みの空間となっている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	開所時、県の指導により各居室に設置していた収納タンスは置き換えが可能とのことで、入居者ごとの希望にそって、馴染みのものへと変更している。居室は畳と洋室から選ぶことができ、食器などの持ち込みも可能となっている。		